沼津市明治史料館通信

二〇一三年一月

通巻112号

■シリーズ沼津兵学校とその人材93
錦絵に描かれた禁門の変
■江原素六とその周辺55
江原素六と会津藩士
■企画展のお知らせ

禁門の変を描いた錦絵（当館蔵）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　93

錦絵に描かれた禁門の変

明治一五年（一八八二）二月に出版された、禁門の変を描いた三枚続きの錦絵がある。中心には御所を守り長州軍と戦う幕府方の軍勢を指揮する馬上の禁裏守衛総督一橋慶喜（後の十五代将軍）が描かれ、また右端には「会津公」、すなわち京都守護職・会津藩主松平容保もいる。

禁門の変（蛤御門の変）とは、元治元年（一八六四）七月一九日、前年の政変に敗れた長州藩（尊攘派）が、勢力を挽回するため京都に押し寄せたものの、会津・薩摩藩などの公武合体派によって撃退された戦いである。

当日の慶喜は、「紫裾濃の腹巻の上に白羅紗に黒の四寸許なる葵の紋附きたる陣羽織を被て熊毛の尻鞘懸けたる金装の太刀を佩き立烏帽子に紫練綾の鉢巻して小袴の裾高く括り上げ、金の采配採つて」（『徳川慶喜公伝』巻三）といった服装だったことが具体的にわかっているので、この錦絵がそこまで正確に描かれたものではないことは一目瞭然である。なお、またがる愛馬は「飛電」という名前だったが、狙撃を受け傷ついたという。

ところで、この錦絵には、他に名前が記された人物として四名の幕臣がいる。慶喜の右側に今堀吉之助、三橋虎蔵、左側に伴野七之助が大きく描かれている。画面左側には長州側の「福原兵」（長州藩家老福原越後の軍）と戦う「三兵」が小さく描かれ、また「砲兵」の文字の近くには大砲があり、旗を振って発射を指示している後ろ向きの人物には「万年鎮太郎」の文字が入っている。

当時、今堀吉之助（登代太郎・越前守）と伴野七之助は講武所頭取、三橋虎蔵は二丸御留守居格講武所剣術師範役であった（『江戸幕臣人名事典』）。しかし、三人が禁門の変の時に京都にいて、奮戦したという記録はないようである。共通点は、いずれも剣客で、後に遊撃隊の幹部となったことであろう。特に今堀は、遊撃隊を率い鳥羽・伏見の戦争に参加し、水戸で謹慎する慶喜の警護に随行するなど、慶喜との関係は深かった。維新後、駿河移住の際には、三人とも大番組の幹部となっている。

万年千秋（鎮太郎・真太郎・隠岐守）は、後に沼津兵学校教授になった旗本であり、当時は幕府陸軍の大砲組之頭をつとめていた。しかし、前年から大砲組を率い上洛していた事実はあるが、将軍家茂の帰府に合わせ六月には江戸に戻っており、また七月一九日に命を受け、八月一日から一二月二日にかけては筑波山の天狗党討伐に出陣しているので（拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成」『沼津市博物館紀要』22）、彼が禁門の変の際に京都にいたというのは明らかな誤りである。

絵の中の登場人物に関して錯誤が生じたのは何故か。この錦絵を描いたのは、画面左下にあるように方円舎清親、すなわち旧幕臣出身の浮世絵師小林清親（一八四七～一九一五）である。これは、彼が明治一五年から一八年（一八八五）にかけて出した「日本外史之内」という歴史画のシリーズの一作であった。

小林も幕末には御勘定下役として上洛したことがあったが、禁門の変には遭遇していなかったようなので、あくまで想像で描いたものといえる。小林は明治初年、剣術興行に同行するなど、今堀・三橋・伴野と講武所→遊撃隊→大番組という同じ経歴を有した剣客榊原鍵吉とごく近い関係にあった。そのため、禁門の変を描くにあたって、榊原から聞いていた彼らの名前を出してしまったのかもしれない。万年については、同じ時期の天狗党討伐に関する記憶と混同した可能性がある。禁門の変で慶喜の側近くで奮戦した人物には、一橋家の物頭奥兼勤や槍剣隊・大砲隊長をつとめ、変後には褒美として銀三〇枚を下された猪飼為正、胸に銃弾を受け負傷をし、やはり銀二二枚を賜った猪飼の隊の隊員、関迪教（広右衛門）らのごとく（『国事鞅効志士人名録』第弐輯、『史談会速記録』第二〇四輯）、もっとモデルにふさわしい人物（幕臣というよりも一橋家直属の家臣）がいたはずである。

余談ながら、禁門の変当時、慶喜に付された幕府部隊には約一〇〇名の別手組がいたが、後年箱館戦争に参加した後、沼津兵学校の体操教授になった本多忠直（幸七郎）は、別手組に属し、御所の警備のため元治元年五月に上洛、翌年四月に帰府したというので（『江戸幕臣人名事典』）、この戦いに参加していた可能性が高い。

（樋口雄彦）

江原素六とその周辺 55

江原素六と会津藩士

江原素六は、慶応二年（一八六六）末に二度目の上洛をし、鳥羽・伏見の敗戦で江戸へ戻るまで、幕府陸軍の士官として上方にあった。京都では、昌平黌の分校である江戸の麹渓書院（麹町教授所）でともに松平慎斎に師事した間柄の、幕臣に取り立てられた元会津藩士林惟純（三郎、一八三三～九六）と懇意だったことが人脈形成や情報収集に役立った。江原の伝記には以下のように記されている。

「会藩人にして林三郎といふ極めて温厚篤実なる君子人あり、此知人によりて京阪滞在の会藩有志に紹介せられたるを以て、京都及び諸藩の情報を得るに少なからざる便利を得たり」（『江原素六先生伝』上篇八八頁）。

江原自身、「京都に滞在中は会津の先公から御依頼を受け、同藩の士族の歩兵砲兵の練兵を教授しました」（『急がば廻れ』）と述べているので、会津藩兵の訓練を担当したらしい。「京都に居る時に山本覚馬と云ふ人の塾に通学して居りました、其時代に会津、桑名、金沢と云ふやうな藩に、西洋の兵式を幕府から人選して教へにやつたものであります、会津はアノ通り武張つた藩でございまして、幕府の柔弱の者を余り能く思はない、けれども他に頼む所もないから前の君公并に藩の有司から懇望されて、私が会津藩に教へに参つた」（『中学世界』第四巻第一号、一九〇一年）とも述べており、会津藩士を教えただけでなく、新島襄の妻八重の兄である会津藩の洋学者山本覚馬（一八二八～九二）に学んだという。山本は佐久間象山の門人、江原は佐久間の高弟・松代藩士蟻川直方（賢之助）の門人であり、学統的にも親しい関係にあったのだろう。山本は京都に滞在中の西周とも親密だった。

また、江原は会津藩家老の息子、同藩軍事奉行添役の神保修理と親交をむすび、鳥羽・伏見敗戦の際には、徳川慶喜は大坂城での籠城を避け、東帰するのが得策であるとする意見を述べあったという（『会津戊辰戦史』、一九三三年、一七四頁）。神保は江戸に帰った後、徹底抗戦することなく藩主松平容保以下がむざむざと東帰してしまったことの責任者、薩長への内通者などとして藩内で糾弾され、切腹させられた。

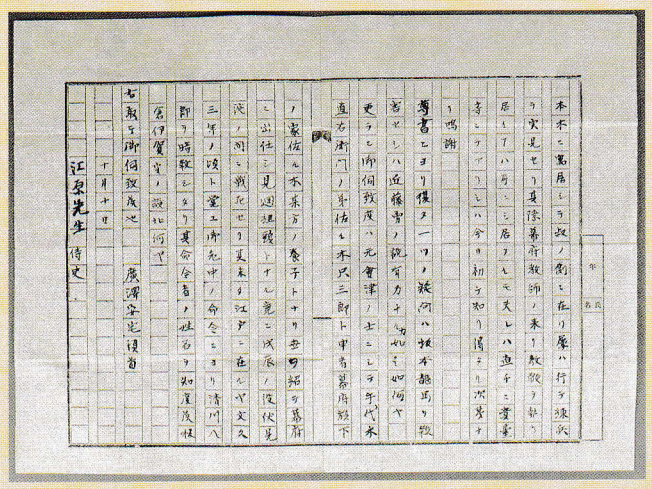
維新後、静岡藩士となった林惟純は、困窮する斗南（旧会津）藩士の子弟たちのため、静岡と東京に構えた塾に彼らを受け入れ、教育をほどこした。静岡の塾には、会津戦争の責任をとって切腹した家老萱野権兵衛の息子某、飯盛山の白虎隊士の生き残り飯沼貞雄、海軍大将となった出羽重遠、陸軍獣医監になった一柳直宰らが来遊したという（「林惟純君事蹟余話」）。江原素六が管理者となった沼津兵学校附属小学校にも西川鐵次郎という斗南藩士の少年が生徒として入学した事実があり、静岡藩は元会津藩士たちの勉学先として門戸を開放したといえる。

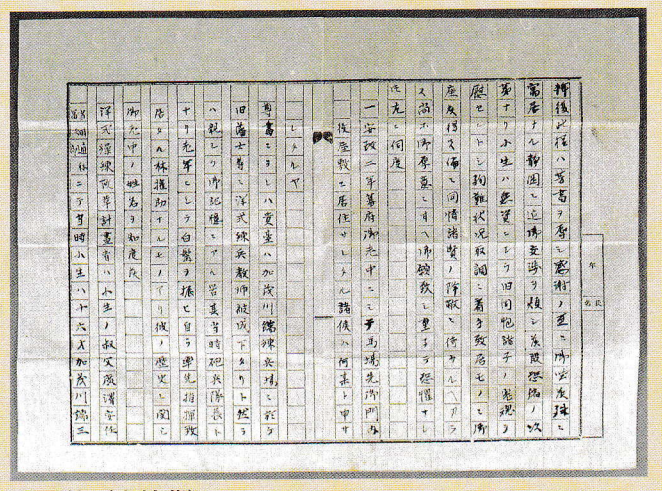
江原は幕末の京都で会津藩士たちと交流したことから、後年、会津藩の歴史編纂において証言を求められることがあった。以下に翻刻する書簡（年不明、江原素六文書）は、元会津藩士広沢安宅から送られたもので、坂本龍馬暗殺を新選組の仕業とする説の真偽、清河八郎暗殺の指令者が老中板倉勝静であったのか否かといった点についての質問である。

拝復此程ハ芳書ヲ辱シ感謝ノ至ニ御座候殊ニ寓居ナル静岡ニ迄御交渉ヲ煩シ候段恐縮ノ次第ナリ小生ハ無資ニシテ旧同胞諸子ノ冤魂ヲ慰セントシ殉難状況取調ニ着手致居モノニ御座候得者偏ニ同情諸賢ノ降敵ニ待サルヘカラス尚ホ御厚意ニ甘ヘ御願致シ重子テ恐懼ナレトモ左ニ伺度一安政二年幕府御老中ニシテ馬場先御門内役屋敷ニ居住サレタル諸侯ハ何某ト申サレタルヤ

尊書ニヨレハ貴台ハ加茂川端練兵場ニ於テ旧藩士等ニ洋式練兵教師被成下タリト然ラハ親シク御記臆ニアル筈其当時砲兵隊長トナリ老年ニシテ白髯ヲ振ヒ自ラ率先指揮致居タル林権助ナルモノアリ彼ノ歴史ニ関シ御老中ノ姓名ヲ知度候

洋式練兵教師ニ居住サレタル諸侯ハ何某ト申サ





江原素六あて広沢安宅書簡（当館蔵）

六才加茂川端三本木ニ寓居シテ叔ノ側ニ在リ屡ハ行テ練兵ヲ実見セリ其際幕府教師ノ来リ教鞭ヲ執リ居ルコトハ耳ニシ居タルモ夫レハ直チニ貴台等ニテアリシハ今日初テ知リ得タル次第ナリ鳴謝

尊書ニヨリ復タ一ツノ疑問ハ坂本龍馬ヲ殺害セシハ近藤勇ノ説有力ナルカ如シ如何ヤ更ラニ御伺致度ハ元会津ノ士ニシテ手代木直右衛門ノ弟佐々木只三郎ト申者幕府旗下ノ家佐々木某方ノ養子トナリ世ヲ紹テ幕府ニ出仕シ見廻組頭トナル竟ニ戊辰ノ役伏見淀ノ間ニ戦死セリ其未タ江戸ニ在ルヤ文久三年ノ頃ト覚ユ御老中ノ命令ニヨリ清川八郎ヲ暗殺シタリ其命令者ノ姓名ヲ知度候板倉伊賀守ノ説如何ヤ右敢テ御伺致度候也　広沢安宅頓首

十月十日

江原先生侍史

なお、広沢安宅（一八五〇～一九二八）は、叔父広沢安任に従い慶応元年（一八六五）上洛、山本覚馬にフランス語を学び、鳥羽・伏見の戦いや会津戦争に従軍した前歴を持つ。京都の山本塾では江原と旧知の間柄になっていた可能性がある。維新後は青森県で乳牛飼育を行い、三本木開墾会社社長、八戸商業銀行重役などをつとめた。著書に『幕末会津志士伝孤忠録』（一九二三年刊）があるので、江原への問い合わせはその本の執筆のためだったのかもしれない。ただし、江原が龍馬暗殺などに関する正確な情報を持っていたとは思えないが。

（樋口雄彦）

企画展のお知らせ

平成二四年度第二回企画展
御成橋命名一〇〇周年記念

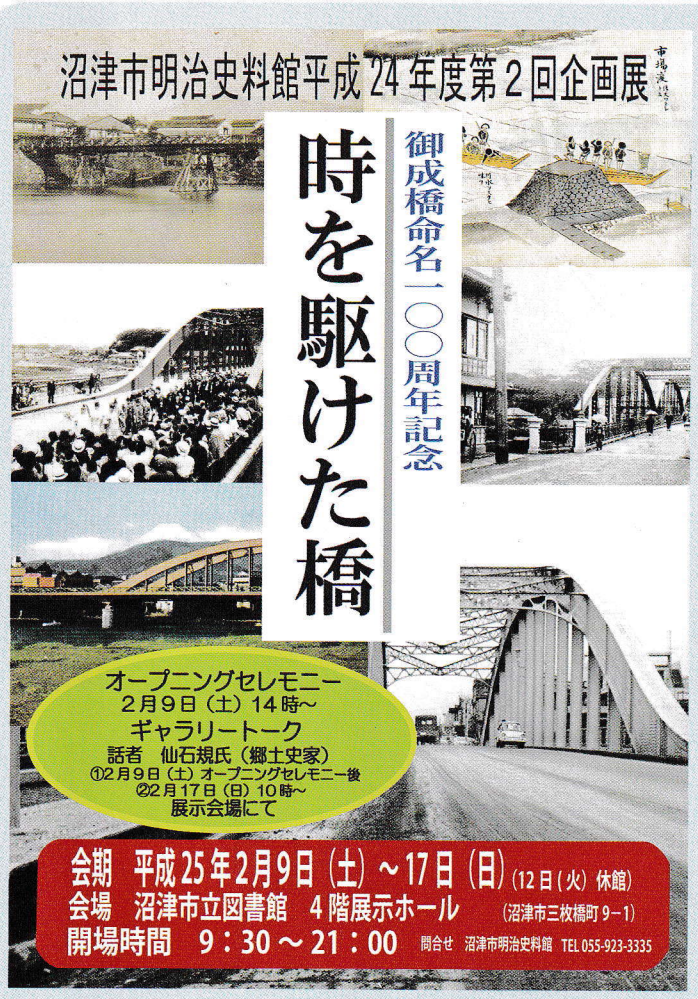
時を駆けた橋

沼津の中心を流れる狩野川に架かる御成橋は、美しいシルエットと相まって、私たち沼津市民にとっては大変なじみ深い橋となっており、まさに沼津のシンボルと言えます。この御成橋の命名一〇〇周年を記念して企画展「時を駆けた橋」を開催します。

本展では、御成橋の前身である「港橋」が明治九年（一八七六）に新築、架橋された時の設計図や経費明細などの古文書資料を初公開し、また、門外不出と言われている長谷寺様ご所蔵の「港橋新築架橋絵馬」を特別にご出品いただきます。また、郷土史家の仙石規氏ご所蔵の御成橋コレクションもご出品いただきます。

ふだんは館で開催する企画展ですが、今回は、狩野川に近い市立図書館で開催することにしました。「御成橋」はもちろんのこと、永代橋などの狩野川に架かる他の橋も展示をご覧頂いた後で、直接実物をご覧いただきたいと思います。

是非ご来場、ご観覧ください。



会　期　平成二五年二月九日(土)～二月一七日(日)

会　場　沼津市立図書館・四階展示ホール

開場時間　九時三〇分～二一時

観覧料　無料

〈イベント〉

◆オープニングセレモニー

日　時　二月九日(土)一四時～

場　所　沼津市立図書館・四階展示ホール

◆ギャラリートーク

郷土史家として知られ、御成橋を愛してやまない仙石規氏に展示を解説していただきます。

会　場　展示会場

参加料　無料

申　込　不要

日　時　①二月九日(土)セレモニー後
②二月一七日(日)一〇時

沼津市明治史料館通信
第112号
平成25年1月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410－0051 沼津市西熊堂372－1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社